

保育者は自主・自発をどのように用いてきたか
—広島大学附属幼稚園『幼児教育研究紀要』を手がかりとして—

武内 裕明¹

The Use of Autonomy and Spontaneity among Preschool Teachers of
Kindergarten Attached to Hiroshima University

Hiroaki TAKEUCHI¹

Abstract : This Study revealed about the historical use of autonomy and spontaneity among preschool teachers of kindergarten attached to Hiroshima University through the research bulletin of early childhood education. First, autonomy and spontaneity are double meaning terms and when narrowly-defined these terms include distinct value judgment. In other words, autonomy and spontaneity mean that such actions have rightness. But broader used case, autonomy and spontaneity mean almost equal to the subjectivity. Secondly, preschool teachers substitute subjectivity for autonomy and spontaneity around the revision of the National curriculum guideline of kindergarten in 1989. Therefore autonomy and spontaneity have scarcely appeared in the research bulletin of early childhood education. Thirdly, change of generation causes revival of these terms. Preschool teachers are becoming to use autonomy and spontaneity again. But long intermission puts out historical experience from preschool teacher's mind, and autonomy and spontaneity are become loose term because of the oblivescence of the precedent discussion of the preschool teachers.

Key Words : autonomy, spontaneity, subjectivity, preschool teachers

1. はじめに

幼児教育において何を育てようとするかを明確化する点で、目的の設定は重要な問題である。このような目的は、一般的には抽象的な言語によって明確化され提示され、保育者たちの間で流通していく。それらの目的は、様々な幼児教育者によって主張され、それぞれに一定の概念体系を有する特有な枠組みである。また、これらの概念はさらに下位概念などや対立する概念によって規定され、教育の適切性の尺度として機能することとなる。

しかし、実際に保育者がその言葉によって子ども観を表現する際には、それらの目的は意味を限定され、規定された言葉としてではなく、日常語として半ば無意識的にニュアンスの選択が行われたかたちで使用される。そのため、そ

れらの言葉はある一定の範疇を有するものの、その範囲内で揺らぎを伴って使用されていることが多いと考えられる。すなわち、幼児教育の目的となる抽象的な概念は、一般に共通に合意され、共有された価値と見なされているものの、実際にはその意味はある程度の幅で移り変わるのではないであろうか。そうであるとすれば、保育者たちはそのような目的を指し示す言葉をどのように使用するのであろうか。あるいはどのような場合にその言葉は用いられなくなるのであろうか。このような言語使用には、保育者が明確化できていない保育観や、保育者の思考の傾向が反映されているはずである。また、その目的の捉え方は、理想的な成長に対するイメージや、社会的な要請に対応して時代によって変遷するばかりでなく、所属する園の方針や教育の歴史、個々の保育者の保育の経験の積み重ねなどによって変遷するものである。このような保育者が半ば無意識的に使用している目的言

1 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

語の使用の特徴を明らかにすることは、自らの保育を省みるために保育を記述する保育者に対しても一定の示唆を与えると考える。

そこで本研究では、幼児教育の目的の主要なもの1つに挙げることができるであろう自主性・自発性に関して、広島大学附属幼稚園を例に考察を行う。

自主性・自発性に関する発表や論文等は、いくつもの種類に大別できる。第1は、理論家たちの規定した自主性・自発性の内容を明らかにすることで、その言葉の指し示すものを具体化しようとするものであり、倉橋惣三を基盤にして1970年から日本保育学会で発表を続けた堀合の一連の発表や、ピアジェを取り上げた猪田(2005)の論文を挙げることができる。このような理論的な研究の一方で、自発性などを概念的に規定し、尺度を定めて、それと様々な要因の影響関係などを明確化しようとする心理学的な手法からの研究もおこなわれている。それらには、川合らによってはじめられた1993年以降の連続的な日本教育心理学会での発表などをはじめとして、山口と門松(1995)による発表などを挙げることができる。このような理論的な、あるいは限定的に使用された概念に関する研究と比較して、歴史的な概念の変遷を追った研究は少ない。山岸(2001)は、保育要領以降の幼稚園教育要領に登場する自主性、自発性の概念を教師の指導性を対立項として検討している。このような理解は、児童中心・教師主導という対立項とそのバランスを巡る歴史的な試みの叙述として評価できるものの、自主性、自発性もつ概念の幅に関しては十分に明らかにできず、また保育者たちによって用いられるそれらの言語の範囲と使用上の特性を明確化するという点では限界がある。したがって、限定的とはいえ保育者たちによる自主・自発という言葉の使用の実際を具体的に検討することは、独自の意義があるといえよう。

以上から、本稿では『幼児教育研究紀要』に掲載された保育者による記述を通じて、自主・自発という言葉が保育者によってどのように用いられてきたのかを明らかにする。

表1 『幼児教育研究紀要』の研究主題及び発行年

巻	研究主題	発行年
1	集団保育による社会性の育成	1976
2	“集団保育による社会性の育成” —その指導をどのようにするか—	1977
3	幼児の認識とその発達	1978
4	「幼児の認識とその発達」 —幼児の認識能力をどう育てるか—	1979
5	「幼児の運動保育」—遊び能力を養う—	1980
6	「幼児の運動保育」—運動発達の順序性を 探る・ボール遊び—	1981
7	「幼児の運動保育」—感覚と運動との統合—	1982
8	共感性と愛他的行為を育てる保育活動	1983
9	共感性と愛他的行為を育てる保育活動Ⅱ	1984
10	自ら考え行為する子どもを育てる保育活動— 選択行為を中心として—(紀要第11号p.49参照)	1985
11	自ら考え行為する子どもを育てる保育活動— 主体的活動を中心として—(紀要第11号p.49参照)	1986
12	豊かなイメージに支えられた遊びの展開	1988
13	豊かなイメージに支えられた遊びの展開— 幼児の主体的活動と環境—	1989
14	幼児一人ひとりののびやかな自己表現を支える 保育—幼児さながらの生活をみつめて—(一年次)	1992
15	幼児一人ひとりののびやかな自己表現を支える 保育—保育者のかかわりと援助のあり方を 求めて—(二年次)	1992
16	幼児一人ひとりののびやかな自己表現を支える 保育—保育の内容と方法の構成をめざして— (三年次)	1995
17	幼児の自己確立の過程を見つめる	1996
18	幼児の自己実現を支える教育課程の編成	1996
19	幼児と自然とのかかわりを見つめる	1997
20	幼児と自然とのかかわりを見つめる(2年次)	1998
21	子どもにとっての保育者の意味を探る～ 自分の保育についての内省を通して～	2000
22	人間関係の深まりの過程を考える(1年次)	2001
23	人とのかかわりを深める援助の方向性を 探る～クラスでの集いを通して～	2002
24	人とのかかわりを深める援助の方向性を 探る(2年次)～クラスでの集いを通して～	2003
25	人とのかかわりを深める援助の方向性を 探る(3年次)～クラスでの集いを通して～	2004
26	自己の力を発揮したくましく生きる子ども を育む教育課程の創造	2005
27	自己の力を発揮したくましく生きる子どもを 育む教育課程の創造—2年次—～幼児が主体的 に生活を生み出すための環境の構成～	2006
28	幼児の自然体験について考える(1年次) ～森の幼稚園構想に向けて～	2007
29	幼児の自然体験について考える(2年次) ～森の幼稚園のカリキュラム開発～	2008
30	幼児の自然体験について考える(3年次) ～森の幼稚園カリキュラムの実践と評価～	2008
31	遊びの充実を支える保育～エピソード記述 を通して体験のつながりを探る～	2009

(広島大学附属幼稚園『幼児教育研究紀要』より作成)

2. 研究の対象と方法

本研究では、広島大学附属幼稚園の『幼児教育研究紀要』を資料として分析の対象とする。『幼児教育研究紀要』は、1976年に第1巻が発行されてから、附属幼稚園の東広島市への移転などのための中断がありながらも概ね1年に1巻の割合で刊行が続いており、1) 実践編と理論編に分かれ学外からの寄稿も寄せられていた最初期の形態を維持した第7巻まで、2) 幼稚園長による、あるいは記名はないものの園長よると見られる理論編の名残が冒頭に残される第15巻まで、3) 園長による簡潔な言及を除いて本編が完全に幼稚園教諭たちによって執筆されることとなる第16巻以降に大別でき、2009年12月現在第31巻まで発行されている。同紀要は、広島大学附属幼稚園の研究主題をテーマとして継続的に実践記録を中心に編纂され、附属幼稚園の研究成果を発信する機関誌としての役割を担っている。

本稿では、『幼児教育研究紀要』の文章から、保育者が自主・自発という言葉を用いている箇所を抜き出し、それらの言葉の量的な使用を明らかにした上で、その変化の理由となると考えられる内容を、研究主題や本文を手掛かりとして分析していく。表1は、『幼児教育研究紀要』の巻、研究主題、及び発行年の一覧である。

3. 自主性・自発性に関する記述

(1) 自主・自発の出現頻度

自主・自発という言葉は紀要を通じてどの程度登場しているのだろうか。まずは、検討対象とした保育者による記述であると判断したべ

ージ数に当たる巻ごとの対象頁数と自主・自発という言葉が登場した回数を表2に示す。また、頁数にはばらつきがあるため、言葉の出現数と頁数の関係について、対象頁数分の出現数を100倍したものを小数点第1位までで集計した出現指数を便宜上作成し、グラフ化した。横軸を巻数、縦軸を出現指数としたグラフを図1として示した。

表2 自主・自発の登場回数

巻	対象頁数	出現数	巻	対象頁数	出現数
1	70	18	17	203	0
2	55	10	18	72	0
3	44	1	19	144	1
4	47	2	20	121	2
5	40	2	21	78	0
6	70	3	22	149	4
7	70	0	23	53	3
8	77	22	24	121	6
9	164	5	25	96	0
10	113	21	26	92	4
11	56	50	27	103	6
12	65	3	28	143	1
13	81	7	29	109	12
14	76	0	30	161	1
15	95	17	31	108	5
16	191	2			

(広島大学附属幼稚園『幼児教育研究紀要』より筆者作成)

全体としては、第11巻の研究主題「自ら考え行為する子どもを育てる保育活動—主体的活動を中心として—」で出現指数が突出している。また、第3巻から第7巻にかけての出現指数の

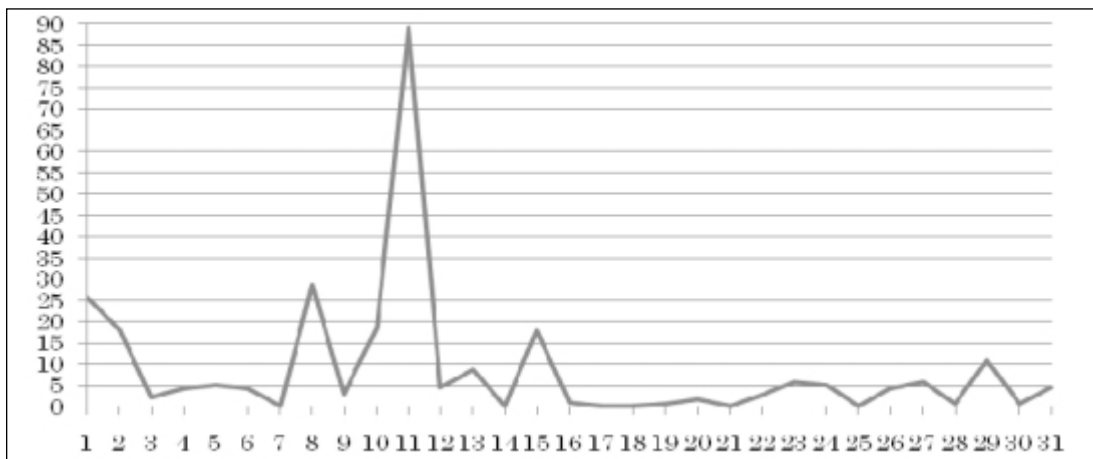


図1 自主・自発の巻ごとの出現指数

低い時期と、16巻から21巻にかけてのさらに出現指数の低い時期は特徴的である。13巻から15巻の時期を境に全体としては自主・自発の出現指数は低下する傾向にあったが、近年出現指数はわずかながら増加の傾向にあるように読み取れる。

11巻の突出に関しては、研究主題で自ら考えて行為する子どもを育てることを意図していることから、その主題が反映された結果と見なすことができるであろう。13巻前後から、自主・自発の言葉の登場頻度が下がるのは、1963年に告示された『幼稚園教育要領』の基本方針に自主的・自発的な活動を促し、という文言が含まれていたのに代わって、1989年に改定された『幼稚園教育要領』の幼稚園教育の基本では主体性という言葉が登場したことと関連している。少なくとも広島大学附属幼稚園は、この言葉の登場に敏感に反応している。1989年の『幼児教育研究紀要』では、早々に「主体的な園生活を支えるイメージ」という章を設定し、「自らが環境に働きかけながら、発見し、確かめ、驚きや喜びを表現していく主体的な生活こそが、幼児期に最もふさわしい生活であり、幼児の心身の調和のとれた発達を促していく」¹⁾と主体的な生活の意義を謳っている。「幼児の自発的な活動としての遊び」という概念が1989年改定の『幼稚園教育要領』にも残されるとはいえ、主体性という言葉の『幼稚園教育要領』への初登場は、自主・自発の概念では表現しきれなかったものを説明するために主体性の概念を使用する根拠を保育者たちに与えた点²⁾、大きな影響力をもったのである。それ以後一定期間は自主・自発の言葉はかろうじて消滅を免れている程度までに徹底的に減少することとなるが、この要因に関しては後にさらに考察を行う。

(2) 自主・自発の概念の一般的傾向

『幼児教育研究紀要』に即して考える限り、自主・自発の言葉は一般に目的概念か説明的な概念として用いられる。一方で、たとえ説明的に用いられる場合であっても、この言葉は具体的な内容を抽象する総合的な概念であり、分析的な概念ではない。このような特性がもっとも明確に表れるのは、保育記録自体には自主・自発の言葉は稀にしか用いられないという点である。自主・自発の言葉は保育記録の中ではなく、保育の目的や、記録された事例の解釈、まとめ

に当たる部分で多用されるのである。このことは、意識しているか否かに関わらず、保育者たちが子どもの実態を描写する言語としてではなく、理想的な状態や子どもの行為を説明する言語として自主・自発という言葉を使用し、保育記録場面と考察場面の言語を使い分けていることを示している。

一方で、自主・自発の概念の規定の仕方は時期によってまちまちであり、歴史的に展望すれば、その使用法は定まっていないと評価できよう。しかし、自主・自発の概念の範疇は、概ね狭義広義のどちらかの意味で用いられているようである。広義にはほとんど主体的という言葉と同義の概念でありながらも、この言葉はより古くは規範的な行為を行っている場合のみ使用される価値を志向する言語であり、時代を下ってもその痕跡を強く残している。このような規範的な行為を子ども自ら行っている状態の説明として、狭義には自主・自発は用いられている。このような二重性がありながらも狭義のニュアンスを幾分か残していること、また自発・自主という言葉が必ずしも子どもを説明する際に妥当ではないかもしれないと考えられるようになったことが相まって、広島大学附属幼稚園では1989年改定の『幼稚園教育要領』の登場以後、自主・自発は一時期使用されることが稀な言葉となるのであった。

(3) 1989年以前自主・自発の使用の傾向

先述のように、1989年改定の『幼稚園教育要領』は、自主・自発という言葉の使用の傾向を大きく転換する要因となったことは疑いない。しかし、全体として自主・自発の言葉が使われやすいという特徴がありながらも、この時期にこれらの言葉の使用される場面や言葉の範疇に関する重要な観点のいくつかを見出すことができる。

まず、注目すべきなのは、1978年から1982年にかけて自主・自発の言葉がほとんど登場しないということである。この時期の研究主題は、「幼児の認識とその発達」、及び「幼児の運動保育」であった。これらの主題は個人の成長に焦点を当てるものではなく、幼児の認識や運動に焦点化された主題である。このような主題の場合、またそれらを明らかにしようとする場合、明らかに自主性・自発性が育まれたかには焦点とならない。保育者たちは幼児の成長をそれらの言葉に託して総合するよりも、幼児の特定の

側面に焦点化して分析的に研究主題となった事項に臨むことになるのである。また共感性と愛他的行為に着目した同じ研究主題を扱っている1983-1984年の間に、自主・自発の登場頻度が極端に変化していることも、認識を焦点化した際にこれらの言葉が用いられなくなることの好例となっている。1年目に漠然とした包括的概念として多用された自主・自発の言葉は、研究が焦点化されるに従って説明言語として用いられることが少なくなるのである。とりわけ1年目に17回にわたって自主・自発の言葉を使用したA教諭が、研究の2年目には1回もこれらの言葉で説明を行っていないことは、そのような言語の使用がたとえ個人の言語使用の傾向に強く依存するとしても、何に焦点化するかによって特定の言葉が用いられるかどうかが大きく変わることを表しているであろう。

ところで、自主・自発という言葉には、特定の価値志向性がある。例えば、わがままや悪い意味で自己主張が強い場合には、たとえ幼児の能動的な行為であってもそれらが自主的・自発的に行われたとは表現されない。1980年代まで、これらの言葉と並列的に、あるいは序列的に用いられた言葉は自立（自律）であった。「集団の中でまず育てねばならないのは、自立性、自主性である。集団に対して自己を主張するとともに、相手の主張も聞く³⁾」といった形で使用される自主性は、幼児が我を通すのではなく、集団と協調的に行動するように自らを統制することを意図して用いられるのであり、狭義の自主・自発の指し示す方向性を端的に示している。その一方で、1986年には2年間にわたる研究主題「自ら考え行為する子どもを育てる保育活動」という主題での研究成果として、このように向社会的に自己を制御する意味を含めないより広い意味の自発的という概念が用いられている。そこでは、「自然発生的な遊びのみが自発的な活動ではなく、環境づくりや保育者の個々への働きかけ、かかわりなどが重要であり、働きかけを受けての活動であっても、自分なりの目標をもってすすんで活動している場合は、自発的な活動である⁴⁾」というように、単純に子どもが始めたということだけを指針として自発として表現することへの反省が表されているのであるが、ここで用いられた自発には社会的な関係性や正しさについての自律的というニュアンスはほとんど消えている。このような広義の意味でこの言葉の使用をしたのは、長く附

属幼稚園に勤め後に副園長となるB教諭であった。したがって、このB教諭的な自主・自発の理解は附属幼稚園に長らく引き継がれると考えてよいであろう。

また、B教諭は紀要に初めて登場した1985年に、自発性を主体性と併置した教諭でもある。B教諭は「子どもたちに意志決定させることは、子どもが自ら考え行為することであり、子どもたちの自発性や主体性を伸ばすことに通じる⁵⁾」と述べ、自発性と同様の趣旨で主体性をたびたび併用している。これは、新しい世代の保育者が、旧世代の用いた価値志向的な自主・自発という概念とは違う概念で子どもを把握し始めていたことを示しているとも読み取れよう。個人的な傾向であることは疑いないところではあるが、1989年の『幼稚園教育要領』の改訂に先立って、既に自主・自発とは異なる範疇の言語として主体性という言葉が一部の保育者によって用いられるようになっていたのである。『幼稚園教育要領』の改訂が主体性という言葉の使用に決定的であったのは、それが主体性という言葉で子どもを評価することの根拠となったためであり、むしろ主体性という言葉が取り入れられたこと自体は、その言葉を用いる必然性やそのように表現することを適切と見なす心情が保育者に整ってきたことの結果であったと解釈できる。

(4) 1992年から2000年の自主・自発の使用の傾向

1992年から2000年にかけての自主・自発という言葉の使用は、これらの言葉がただ子どもから始まった行動を示すものではなく規範的な行動であることをも意味してしまう使用のしにくさ、主体性という言葉のいわば国からの公認を受けた推奨、社会性を重視した自律的な幼児像への関心が相対的に弱まったことなどを受けて、激減していく。1992年発行の紀要第15号では自己実現などの概念の説明のキーワードとして用いられているが、その後は長らく主体性、自己活動、「自分の～」など幼児を主体とした表記などの増加とともに自主・自発が使用されない年も珍しくなくなってくる。自主・自発という概念を1985年以降に経験してきた保育者たち、すなわち主体性という言葉が登場したことによる子ども観の変化を経験してきた保育者たちは、主体性という言葉を用いる一方で、自主的、自発的という言葉を使用しなくなっていた。これは、園でのこれらの言葉や、社会の幼児を

把握する概念の変更に伴った「歴史」を経験した結果であったであろう。このような中で、自主・自発の言葉を用いるのは、個人的にこのような言葉を使用する傾向を持つ数少ない保育者たちであった。例えば、1997年から紀要に登場するC教諭は、この時期に自主的・自発的という言葉を経験的に使用したが、その使用法は主体的と大差なく、これは主体性という言葉が導入されたことのインパクトを実感していない結果であるといえるであろう。

(5) 2001年以降の自主・自発の使用の傾向

2001年以降も、自主性・自発性はC教諭、さらに2005年から紀要に登場したD教諭によって個人的に用いられる一方、基本的には大幅に使用が増えることはない状態である。紀要29巻での一時的な使用の増加はほぼ3歳児に関する記述に偏っており、筆者が明記されていないものの3歳児を担当したD教諭の個人的な傾向によるものであろう。以前よりもこれらの言葉が用いられるようになってきていることには、主体性という言葉と自主・自発を明確に区別したことが忘れられ、これらを曖昧に混用できる状況が生じていることも影響しているであろう。しかし、狭義の自主・自発の持つニュアンスは未だに払拭できていないことも、主体性という言葉の使用のほうがより一般的なものとなっている現状につながっている。例えば2003年には歯磨き指導に関する考察で「幼児期の基本的生活習慣の形成を考えると…常に『いかに主体的な自発的な活動となるか』ということが課題となる」⁶⁾として、主体性は自発性と並行して登場している。このように、現在でもなお正しい方向性があらかじめ決まっている場合に、自主的・自発的という言葉は用いられがちなのである。しかし、このような規範的行為の習得は幼児教育の主要な目的とされなくなってきており、このことと自主・自発という言葉が用いられなくなったことは密接に関連しているといえよう。

また、自主・自発の言葉が明確な意図で使用されなくなって久しいこともあり、この期間の言語の使用はこれまでの附属幼稚園の歴史的な経緯を踏まえられないものが多くなり、また自主・自発と主体性との関係性に関しては矛盾が多くなり始めている。とりわけ2005年に附属幼稚園が「めざす子ども像」として4つの視点を規定し、その視点の1つ主体性の側面に下位概念として自主性が含まれたこと⁷⁾によって、そのよ

うな矛盾は顕在化している。主体性の下位概念として自主性が登場した以上、現実的には主体性の側面の記述に自主性という言葉は説明概念として登場していいはずであるが、実際にはこの側面の説明には直接主体性が用いられ、自主性はほとんど用いられない。このことは、概念規定を行っているにも関わらず、実際には主体性と自主性が同等のものとして使用されていることを物語っている。また、2006年には「子どもは本来、自分の周りもの(ママ)を自分に取り入れたいと願い、興味や関心をもちかかわっていきこうとする自発性をもっている」⁸⁾として、自発性は子どもの本来もっている性質であるかのように記述されるのである。めざす子ども像は変更されていないため、自発性は生得的なものか目指す方向性であるのかという保育者間の位置づけさえ定まっていないことが顕わになっているのである。さらに、自発性に関して、1986年に自然発生的な活動だけが自発的なものではないと結論した経験は、既に忘れ去られている。2005年には「保育者が進め方や過ごし方を全て決め、知らせてしまうと、子ども達の自発的な力を育てていくことができないのではないか」⁹⁾との見解が示されるのであり、保育者たちの働きかけがあっても自発的な活動が可能であるというかつての結論は顧みられていない。

4. おわりに

以上のように1976年以降の31巻に及ぶ『幼児教育研究紀要』における自主・自発という言葉の使用の変遷を追ってきたことで、自主・自発という言葉に関して以下の点を指摘できよう。

第1に、狭義の自主・自発は行為としての正しさなどの価値を含んだ自律的な活動を説明する言葉として用いられ、そのような痕跡は今日でも残っている一方、広義には主体性とほぼ同義に用いられるということである。しかし、後者のような使用には、自主・自発の狭義のニュアンスが干渉し、結果的に主体性と完全に置き換わるほどに普及する言葉ではなくなっていることが指摘できる。

第2に、自主・自発の言葉は1990年代初頭までは比較的多用されていたが、1989年の『幼稚園教育要領』改正に伴って登場した主体性という言葉に置き換えられ、それ以後かなりの期間にわたってほとんど用いられない言葉となっていたことが挙げられる。そのような中、細々と

これらの言葉を使用してきたのは、主体性への転換前や転換を知る保育者というよりも、主体性の語が広く用いられるようになった後に附属幼稚園にきた保育者であった。その言語使用は厳密に言葉を選んだものというよりも、社会的な、そして園内の歴史的な経緯を知らないために、主体性と自主・自発との間を特段区別することなく用いていたものであったといえよう。

第3に、歴史的な経緯が忘却されるにつれて、再び自主・自発という言葉は保育者の間で用いられつつある。しかし、長らく使用されないままの言葉であったがために、その使用法はこれまで実際には積み上げていたはずの考察の成果を反映してはおらず、概念的に詰められていない曖昧なものとなっているといえよう。

これらの実態からは、自主・自発という言葉が独自の範疇を持つ一方で、社会的な影響、園独自の歴史、個人的な傾向などの積み重ねにより、使用され、使用されなくなっていく過程の一端を明らかにできたのではないであろうか。保育者によるこれらの抽象的な言語の使用は自らの保育経験と密接に結びついている。その経験の中で保育者はある概念についての理解を深め、より適切に処理しようとしていくのである。その一方で、このような経験は分析されず、体系的に保存されることもなく、時間の経過や保育者の異動などに伴って忘れられ、新しく積み重なっていく経験によって更新されていくのである。独自の研究紀要をもち、紀要執筆を通じて過去の成果をしばしば振り返る附属幼稚園の保育者ですらこれらの成果を保存することはできない。しかし、自主・自発は過去に多用され、様々な検討の重ねられた言葉である。それらの使用の実際を明らかにすることは、保育者にとって自主・自発という目的を考える際に、過去の考察の経緯を整理となるとともに、これらの言葉の使用に対して何らかの「新しい」観点となるのではないであろうか。

注

- 1) 広島大学附属幼稚園 1989 幼児教育研究紀要 13 17
- 2) このように表現するのは、『幼児教育研究紀要』を見る限り、B教諭の登場に自発性と並列的に用いられており、それは1985年に遡ることができるためである。
- 3) 広島大学附属幼稚園 1976 幼児教育研究紀要 1 16

- 4) 広島大学附属幼稚園 1986 幼児教育研究紀要 11 8
- 5) 広島大学附属幼稚園 1985 幼児教育研究紀要 10 118
- 6) 広島大学附属幼稚園 2003 幼児教育研究紀要 24 109
- 7) 広島大学附属幼稚園 2005 幼児教育研究紀要 26 16
- 8) 広島大学附属幼稚園 2006 幼児教育研究紀要 27 25
- 9) 広島大学附属幼稚園 2005 幼児教育研究紀要 26 69

引用文献

- 広島大学附属幼稚園 1976-2009 幼児教育研究紀要 1-31
- 堀合文子 1970 自発性を尊重した幼児教育方法を一考する—倉橋惣三先生の保育原理を土台として—日本保育学会大会研究論文集 23 175-176
- 猪田裕子 2005 幼児教育における遊びと自発性の一考察—ピアジェの理論を軸にして—関西学院大学 人文論究 55 (1) 264-278
- 川合正美, 大竹信子, 西谷さやか, 染宮和子, 青木祐子, 山田スエ 1993 自発性の水準からみた幼児の自主性の検討 I: 尺度構成と評価—日本教育心理学会総会発表論文集 35 117
- 文部省 1989 幼稚園教育要領 フレーベル館
- 山岸雅夫 2001 日本の幼稚園教育における「幼児の自発性, 自主性」と「教師の指導性」—その関係観を類型化する試み—新潟大学教育人間科学部紀要, 人文・社会科学編 3 (2) 261-266
- 山口茂嘉, 門松 良子 1995 幼児の自発性と集団生活におけるきまり意識—日本保育学会大会研究論文集 48 838-839